



池のボールを拾う竿は一組に一本ですみませんが、目土袋は一つでは足りません。なのにほとんどのコースが人数分の目土袋を備えません。

しかし、一人一袋の朗報が各地から聞こえてきました。ピッチマークやバンカーと同じ、デイボット跡も自分で始末するのがあたりまえと、マイ目土袋を持つ上質ゴルファーが各地で増殖中です。

今年当欄でも洲本GCや千刈CCの素晴らしい事例を紹介しました。千刈の有志会の動きは評判となり、神戸GCの有志たちがまず百個、名神竜王CCで三百個、さらには宝塚GCでも……と動きが

# AZAMI

あざみ  
上級より  
の教え  
ゴルフマナー  
修得講座

AZAMI(刺) スワトランドの国花。短い夏の、ラフに咲く可憐な花。に、この先住者は刺の花で、平和な暮らしを奪う権利はないのだとセント・アンドリュースの聖人フンリー卿が論じて、アンブレヤブル官言させたという逸話が残っている。

鈴木 康之  
挿画●唐仁原教久

広がっているそうです。

茨木CCの青草会は八十人ほどの会ですが、姉妹コースの霞ヶ関CCの青草会とともに目土袋を常用しています。

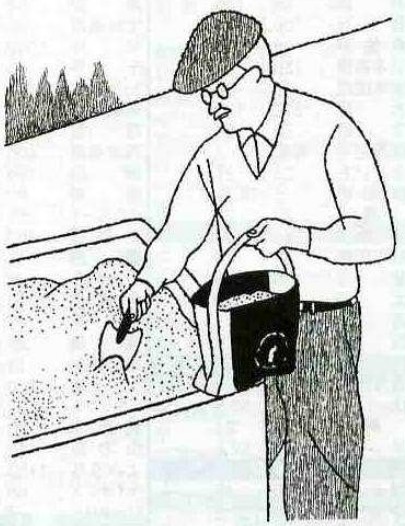
それを見て、茨木の中のほかの会も遅れてはならじと次々に目土袋の注文をマスター室に頼んでいるとか。

宮城の花の杜GCでは月例出場者たちが率先して目土袋を手下げ、コースをきれいにしていくとか。

「ヤスさん、これ、どう」と

先輩の藤岡三樹臣さんが自慢げに見せたのは、カラフルな格子縞の可愛い手提げ布袋と折りたたみ式スコップ。「どっちも百円ショップでみつけた」と。これをホームコースのカレドニアンGCの会長が見てノッて、同系の富里GCの分も合わせて柄違いを大量に仕入れたとか。話が愉快になつてきました。

時折、ターフが埋め戻されているのを見かけます。戻した人の気持ちが見えて嬉しく



お国柄と言つてしまえばそれまでです。しかし、本場のゴルフファーたちが、総本山のゴルフファーたちが、ゴルフ規則第一章エチケットに謳われている「コースの保護」ショット跡の

なります。が、せっかくてすがターフは乾いてゴミになります。やはり砂で保湿してあげないといけません。ところで、本場スコットランドではどうされているのでしょうか。あちらに長くいた友人の神谷秀樹さんは「目土袋は見たことないです。根が横に伸びない芝だからターフがきれいにとれます。それを元に戻すことだけがマナーでした」と言います。

私の旅の経験でも同感です。スコットランドでもアイルランドでも砂を持つプレーヤーもキヤデイもいませんでした。観光客の多いオールドコースはデイボット跡が目にあまり、

呆れて写真に撮つてきました。芝が薄いといえボール半分が沈む深さでした。

アイルランドのラヒンチとトゥラリーで、六、七人の作業員がバケツを抱えて並び、手で砂を握って落とし、足でならしている風景に出会いました。これがリンクスでの流儀なのでしようか。

修復をプレーヤー自身はやらず、人まかせとは。アメリカではどうでしょう。オランダでは。友人たちから情報が寄せられています。次回ご紹介します。外国と比較しますと、私たちの目土は世界に誇れる美風のようなのです。

ゴルフの品格  
向上にこの一冊！  
鈴木康之著  
「ゴルフのスピリット」(小社刊)

新書判・並製  
定価900円(税込)

すずきやすゆき  
ゴルフマナー研究  
家 著書に「ビー  
ターたちのゴルフ  
マナー」(小社刊)  
などがある



## 目土は世界に誇る 日本の礼法かも(上)

